

細見古香庵生誕120年記念 美の境地

毛織物業で財を成し、細見コレクションの礎を築いた初代細見古香庵こと細見良(1901-1979)。

熱き思いをもって蒐集した美術品は宗教絵画や和鏡・密教法具などの金工品、茶の湯釜、根来、七宝、土器などと多岐にわたります。古香庵はこうした蒐集品を茶会やもてなしの場で活用し、独自の境地を展開してきました。その精神は二代古香庵や当館の展示スタイルにも大きな影響を与えています。

本展では初代の生誕120年を記念して、「世界最高の美術品は日本の藤原時代の仏画である」という信念のもとで出会った平安時代の「重要文化財 愛染明王像」などの仏教絵画や、強い憧れを抱いていた豊臣秀吉を描く「重要文化財 豊公吉野花見図屏風」、研究にもいそしんだ茶の湯釜など、興味の赴くまま、己の美意識を信じて、生涯をかけて追い求めた蒐集品を厳選して紹介します。

— 展覧会要綱 —

1. 展覧会名称 細見古香庵生誕120年記念 美の境地
2. 会 期 2021年8月24日(火)～10月17日(日)
3. 開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
4. 休館日 毎週月曜日(祝日の場合、翌火曜日)
5. 入館料 一般 1,300円 学生 1,000円
6. 主催 細見美術館 京都新聞
7. 会場 細見美術館 京都市左京区岡崎最勝寺町6-3
<http://www.emuseum.or.jp>
8. 本展連絡先 細見美術館 TEL: 075-752-5555(代) FAX: 075-752-5955(代)
広報担当 大塚 kouhou@emuseum.or.jp

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご入館および施設のご利用にあたってはマスクをご着用ください。また、急激な状況の変化により、止むを得ず会期・営業日時等を変更する場合があります。詳しくはホームページをご覧ください。



細見良 明治34年(1901)～昭和54年(1979)

兵庫県美方郡浜坂町(現 新温泉町)栃谷出身。13歳の時、大阪に出て奉公、のち毛織物業界に入る。大正13年(1924)23歳にして泉大津市に細見良商店を創業、昭和5年(1930)にはスミレ毛織物株式会社(後の泉州毛織物株式会社)を創立、主にラシャや毛布を製造した。嵯峨天龍寺関精拙老大師より「古香庵」の名を賜る。30代半ば頃から日本の古美術に関心を寄せるようになり、蒐集を始める。苦節を重ね、研究者に教えを乞いながら審美眼を鍛えた。昭和36年(1961)に事業一切から引退、晩年は優れたコレクションの形成に没頭した。

— 主な出品作品 —



重要文化財 愛染明王像

平安時代

赤黒い体、大きく見開かれた眼。恐ろしい形相で人間の愛欲を戒め、敬愛の道を説く明王像である。愛染明王は平安後期から鎌倉時代にかけて、貴族の間で広く信仰された。

本図は12世紀中頃の作と考えられ、現存最古の愛染明王像。陰影のついた体つきは、人間のようにふくよかに表わされている。また装身具や光背には金銀が使われ、ぼかしを効果的に用いて迫力に富んだ、存在感ある姿に仕上げている。原三溪旧蔵。



重要文化財 金銅春日神鹿御正体

南北朝時代

常陸鹿島より、春日明神が鹿に乗って大和に影向した姿を表わす。鹿の背に立てられた榊には鍍銀の鏡が掲げられ、鍍金による五つの円内に春日五社の御正体が線刻されている。

いわゆる春日曼荼羅を立体で再現したものだが、このように大きく豊かな表現による像は他にはない。神鹿の愛らしい表情や体つきは、今にも動き出しそうなほど写実的である。また榊の葉には虫喰いの痕が見られるといった、隙のないリアリズムに優美な趣が加わり、類い稀なる神鹿像が誕生した。



重要文化財 豊公吉野花見図屏風

桃山時代

文禄3年（1594）、太閤・豊臣秀吉（1536～98）は、奈良の吉野山で花見を催した。本屏風は、家臣など一行が五千人に及んだというその盛観を満開の桜のなかに描き出す。左隻の中央あたりに、金峯山寺の本堂、蔵王堂が威容をみせる。花見の3年前になされた再建事業には秀吉の寄進があった。ここに描かれた蔵王堂は、本尊の巨大な蔵王権現像三体とともに現存する。秀吉はこの花見に際し、能「吉野詣」を創作し自ら演じた。秀吉一行の前に蔵王権現が現れ、その治世をことごとくというものである。秀吉の花見にも、古代以来の修験道の聖地・吉野という、神仏いますところへの眼差しがあった。しかし天下人としての自意識はまた、蔵王権現の威力をもしのいでいたのである。



資料（画像）・取材をご希望の方は、ホームページリリースページもしくは左記QRコード「資料（画像）申込フォーム」からお申込みください。

細見美術館